

I 研 究 経 過

本校は、昭和 53 年 4 月に開校し、本年度で 7 年目を迎える精神薄弱養護学校である。開校以来“表現化に視点をあてた教育課程の編成・実践”の研究に続き“豊かな心をもち、たくましく行動する子”の育成に取り組んでいる。その都度、研究紀要や公開発表会をもって、本校の考え方なり研究の方向を示しているが、ここで経過をふりかえってみる。

1 昭和 53 年度の研究

研究の方向を「積極的に参加しうる人間の育成」— 小・中・高等部一貫した教育内容の精選と構造化についての共通理解 — と定め、その教育内容選定の視点を、自立化、社会化、表現化、職業化におくことにし、教育内容表の作成にかかり「表現化に視点をあてた教育課程の編成」とした。

2 昭和 54 年度の研究

53 年度に作成した教育内容表及び年間指導計画の実践過程の中から— 社会的自立をめざす学習指導の研究 — に取り組み、「社会的自立」をめざすための各学部を中心分野と各学部の教育目標を次のように決定した。即ち小学部は、自立化を中心にして、表現化とのかかわりを、中学部は、社会化を中心にして、表現化とのかかわりを、高等部は、職業化を中心にして、表現化とのかかわりを基本に指導を展開する。

3 昭和 55 年度の研究

54 年度の実践の深化と、学習指導法の改善、さらに評価についての研究を進め、各学部の特色を一層明確にしようとした。

4 昭和 56 年度の研究

指導内容の検討に重点をおき、特に重度、重複化に対する内容の検討を行い教育内容表の改訂をし、「生きてゆく力」となるための個人生活の基礎作りから集団生活への適応、さらに社会的職業的生活への発展としての学習内容の一貫性の問題が研究の中心となった。そのねらいとしているものは「社会的自立」であり、その能力の育成のために、「表現化」に中心をおき、しかも「表現化」の内容は唯単に言語的や表記的なものにとどまらず、「意志伝達」をするためのあらゆる表現を指しているものである。

5 昭和 57 年度の研究

57年度には、新しい研究主題を設定して、これに取り組むことになった。その際、前年度までの研究の成果を継承することと、一方では新しい観点に立脚するという2つの点を同時に満足させることが必要であった。こうして得られたのが「豊かな心をもち、たくましく行動する子」という主題である。最終的にこれに落ち着くまでには討論の積み重ねがあったことはいうまでもないが、その過程で出された考え方の主なものをここに挙げておく。

① 体力・気力の育成 — 本校高等部の生徒が、卒業後直ちに社会的・職業的場面に参加することになるのを考慮して、先ず必要とされるこれらの資質を育成しておかねばならないとする発想であった。この考え方は、「表現化」の継承になるものであり、今回の「たくましく行動する子」という表現に生かされることとなった。② 「養護・訓練」の充実 — 多くの精神薄弱養護学校と同様、本校にも、これへの取り組みが弱いとする反省が基礎にあったためである。「養護・訓練」は新しい主題の実践の中に吸収されることとなったが、その具体的な方法は今後の検討に俟たねばならない。③ 感受性を育てる — この考え方は、ひとつには認知能力の訓練が精神薄弱児教育のカギであるとする点と、今ひとつ、「行動・表現」されるべき心的内容の充実が必要とする点との、ふたつの観点から出て来たもので今回の「豊かな心」という表現で生かされている。

1学期から2学期の初めにかけて、討論の中で出されたこれらの考え方を包摂して採択されたのが今回の主題である。そして、この主題の具体的内容として、「主題への取り組み」の中で挙げられているような若干の補足が加えられた。2学期にはこの主題を実践し、検討するための研究授業を繰り返し行ったが、その成果は、3学期の研究発表と、紀要第4集で示したところである。

6 昭和58年度の研究

前年度までで一応の基本的な考え方が確立し、実践段階に入った。その取り組みは小学部では生活単元学習を中心に実践を行った。中学部では、生活単元学習と作業学習を中心に実践が行われ、高等部では、作業学習を中心に実践を行った。その成果をまとめ紀要第5集に載せ、5月に研究発表をして研究を深めた。

7 昭和59年度の取り組みについて

「豊かな心をもち、たくましく行動する子」というテーマからして、もっと個に深く入りこんで指導を徹底させていかなければ定着が困難であるとの反省から、生活単元、作業学習を中心としながらも個に視点をあてて研究をすすめていこうとする動きが現われ、その流れにそって研究をすすめ、まとめることにした。また、教師もひとりひとりが各児童・生徒に課題をもって取り組み、その中のひとりの児童・生徒の記録をまとめて研究紀要に載せることとした。まだまだ問題点はあるにせよ、このテーマについて研究を始めてから3年目である。従って一応のまとめの時期と考えて、本年度2月に研究発表大会を開催して、実践を世に問い、その指導の中から今後の研究の方向づけを見出すこととした。